

日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育学
研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の一側面に
関するプロソポグラフィ的研究 (8)

—1980 年以前の名古屋大学教育学部スタッフのバイオグラフィー—

鈴木 篤

A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational
Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (8)
—Biographies of the Staff Members of the Faculty of Education of Nagoya University in
or before 1980—

SUZUKI, Atsushi

大分大学教育学部研究紀要 第 42 巻第 1 号

2020 年 9 月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 42, No. 1, September 2020

OITA, JAPAN

日本の研究大学ならびにその前身高等教育機関における教育 学研究スタッフに着目した教育学研究の歴史的発展過程の 一側面に関するプロソポグラフィ的研究 (8)

—1980 年以前の名古屋大学教育学部スタッフのバイオグラフィー—

鈴木 篤*

【要 旨】 本論文では「プロソポグラフィ」の手法を用いて、名古屋大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフの伝記的データを収集し、それら相互の比較を通して、集団間・時期間の共通性と差異を確認するための準備作業を行った。名古屋大学教育学部という事例において、彼らのアカデミックなライフコースに着目し、活字化された資料を用いている。

【キーワード】 プロソポグラフィ 教育学研究 名古屋大学 歴史

I 問題の所在と研究方法

本稿は鈴木 (2018a) によって提起された課題に応えるべく鈴木 (2018b) から鈴木 (2020) までで明らかにされた知見に対し、名古屋大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフの事例を明らかにすることで、研究上の貢献を試みるものである¹⁾。研究方法は鈴木 (2018a) で示された通り、プロソポグラフィの手法を用いてあくまでも活字化された資料のみを使用しながら、検討対象高等教育機関に在籍した教育学研究スタッフの研究活動を取り上げ、制度面・スタッフ面におけるその発展の概要を描出することとする。そのことにより、今後、日本における教育学研究の歴史的発展過程に関するより詳細な研究が生み出されるための契機をもたらすことを目指したい。

日本の高等教育機関における教育学研究スタッフ設置状況の歴史的変遷については、①1886 年～1901 年 (帝国大学内の教育学講座、高等師範学校、女子高等師範学校がそれぞれ一つずつ揃った時期)、②1902 年～1918 年 (帝国大学内の教育学講座、高等師範学校、女子高等師範学校がさらに各一校増設された時期)、③1919 年～1943 年 (帝国大学内の教育学講座がさらに増設されるとともに、文理科大学が 2 校設けられ、教育学研究スタッフが大幅に増加した時期)、④1944 年～1948 年 (高等師範学校・女子高等師範学校が増設されるが、敗戦とその後の混乱を迎える時期)、⑤1949 年～1965 年 (新制大学の創設と戦後体制の確立期)、⑥1966 年～1980

令和 2 年 6 月 1 日受理

*すずき・あつし 大分大学教育学部発達科学教育講座 (教育学)

年（学芸大学理念の転換と新構想大学の設置）の6期に区分することができよう。1980年度までの着任者を対象とする理由は、新構想大学としての筑波大学の開学（1973年）と東京教育大学の閉学（1978年）を経て、現在の教育学研究における制度的体制が一定程度整った時期としてこの時期が重要な意味を持つためである（時期区分はいずれも年度）。

本稿では「名古屋大学教育学部における教育学研究スタッフ」という範囲に対象を限定し、プロソポグラフィの作成を試みる。同機関は戦前期には文系学部を持たなかった旧帝国大学であり、教育学部を設立する基礎のないところに教育学部や文学部を創設することとなった事例であることから、今後、他の研究大学の事例と比較することで、共通性と相違点などを明らかにすることも可能となると思われる。分析対象者は名古屋大学教育学部の創設された1949年から、1980年度までの着任者とし、（比較的長期的な勤務を前提として採用が行われたと考えられる）講師以上の職位での勤務者とする。

II 各機関の歴史と研究スタッフ

1 名古屋大学教育学部の歴史

名古屋大学教育学部は、1949年5月31日に国立学校設置法の交付により新制名古屋大学の発足とともに創設された学部である。もともと、名古屋には1945年4月1日に岡崎高等師範学校が設置されており、さらに戦後、1948年に設立された旧制名古屋帝国大学の文学部には当初、教育学科の設置も予定されていたのであるが、岡崎高等師範学校と教育学部との間にはスタッフ面での断絶が一定程度存在していること、文学部内の教育学科案も1948年7月中に教育学部新設の方針が具体化すると独自の学部構想へと向かったとされることなどから、これらを前身高等教育機関とみなすことには一定の留保が必要だろう。1949年に新制名古屋大学が誕生した後、教育学部は（岡崎高等師範学校の遺産に頼りながらも）新たな学部として創設され、その後数年間をかけて大規模に拡充されていったのである。

収集した情報・資料を分析した結果、名古屋大学教育学部には以下の31名の教育学研究スタッフの勤務が確認された。

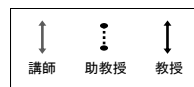


図1 凡例（図2～4）

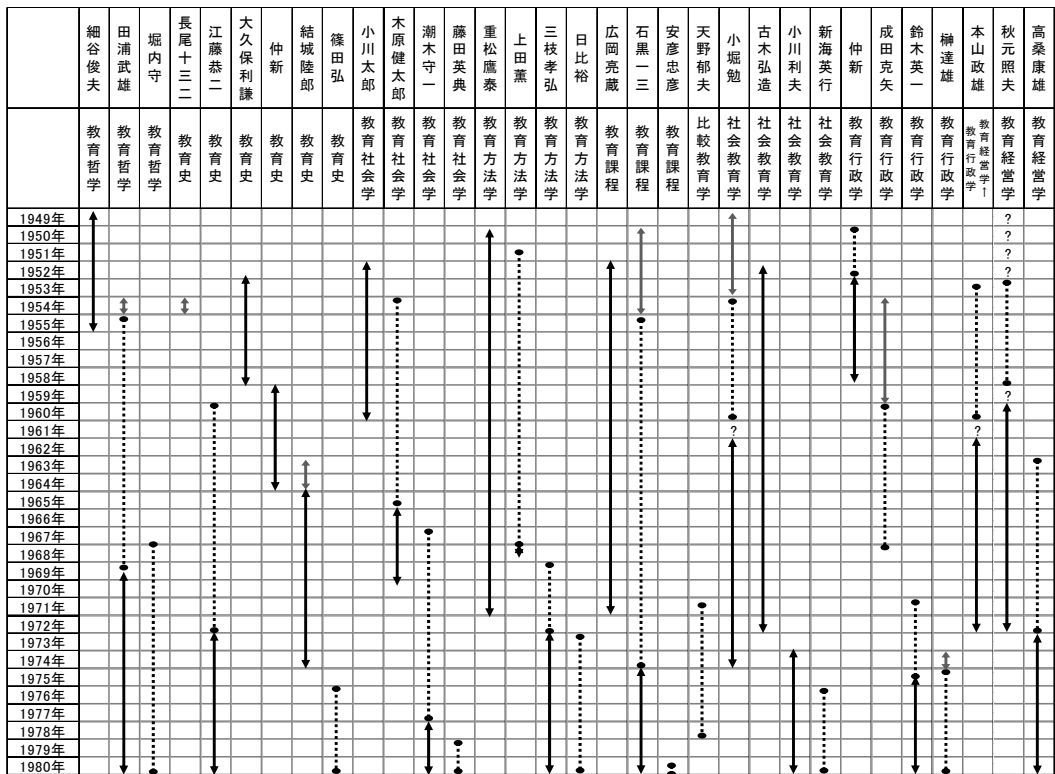


図2 名古屋大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフ

2 名古屋大学教育学部に勤務した研究スタッフ

本研究における情報・資料収集作業からは以下の通りの研究スタッフ名とその詳細が明らかになった。

1) 教育哲学領域

細谷俊夫（1909年8月29日東京府北多摩郡生，2005年5月16日没）は1929年に東京帝国大学文学部に入学し，1932年に卒業した。1932年からは東京府豊多摩郡淀橋町立淀橋第四尋常小学校で代用教員，1933年からは訓導を務め，1935年には愛知県岡崎師範学校の教諭となっている。1936年に東京帝国大学文学部の助手となり，1940年からは講師として勤務している。1946年からは岡崎高等師範学校に勤務し，同年4月からは講師，同年7月からは教授を務めたが，1948年9月14日に名古屋大学文学部に教育原論講座が設けられると同講座の教授に就き，1949年8月には名古屋大学教育学部の開学とともに同教授となり，1956年3月まで勤務した（1952年10月以降は併任）。1952年に東京大学教育学部に異動し，同年10月16日から1970年3月31日まで教授を務めている。1970年4月1日から1975年3月31日まで立教大学文学部の教授，1975年1月から1983年3月までは白梅学園短期大学の学長として勤務した。1936年4月12日に入澤宗寿の長女伊都子と結婚している。著作に『教育環境学』（目黒書店，1932）や『児童環境学』（刀江書院，1935），『近代社会の教育』（朝倉書店，1952）などがあり，第二次世界大戦後は社会科の教科書編集にも携わった。

田浦武雄（1923年1月24日長崎市生）は第五高等学校で1941年4月から1944年9月まで学んだ後、東京帝国大学文学部において1944年10月から1948年9月まで学ぶと、同年10月から1951年3月まで大学院で学んでいる。1951年4月に名古屋大学教育学部に助手として着任すると、1953年5月より講師、1955年7月より助教授を務め、1969年12月から1986年3月まで教授として勤務している。1986年から1996年までは愛知学院大学教養部の教授を務め、1996年*²⁾から2004年3月までは柳城短期大学（1996年より名古屋柳城短期大学に改称）において学長・理事兼教授として勤務した。1961年8月から1962年まではハーバード大学エンチン研究所に招致研究員として滞在し、イズラエル・シェフラー（Israel Scheffler）のもとで研究に取り組んだ。1969年10月1日には学位論文「デューイ研究」により名古屋大学から教育学博士の学位を授与されている。著作には論文「デューイにおける経済と教育」（『教育学研究』、1952）や論文「デューイにおける宗教と教育」（『教育学研究』、1954）などのデューイ思想に関するもののほか、論文「宗教教育の教育社会学的考察」（『教育社会学研究』、1952）など宗教教育に関するものなどがある。

堀内守（1932年4月10日長野県生）は1959年3月まで東京大学教育学部で学び、その後、大学院で学んでいる。1968年名古屋大学教育学部に着任すると、同年1月から1980年*までは助教授、1981年*から1995年3月までは教授として勤務している。1995年*には名古屋大学大学院多元数理科学研究科に勤務した。1971年3月25日には学位論文「コメニウス研究」により名古屋大学より教育学博士の学位を授与されている。著作には「コメニウス教育の方法研究の前提」（『教育学研究』、1963）や「<神の三書>性とコメニウス教育学的方法的発展」（『教育哲学研究』、1963）などのコメニウス思想に関するものがある。

2) 教育史領域

長尾十三二（1924年2月8日生）は東京文理科大学で学び、1949年3月に卒業した後、名古屋大学教育学部の助手（1952年4月から1953年まで）ならびに講師（1953年4月から1955年3月まで）として勤務した。1955年に東京教育大学教育学部に着任すると、同年6月から講師、次いで1973年*までは助教授、1974年*から1975年4月までは教授を務めた。1975年4月10日からは1983年3月31日までは立教大学文学部に教授として勤務し、1983年*から1993年*までは中央大学文学部の教授を務めている。1969年から1970年にかけては計9カ月間、文部省長期在外研究員としてテュービンゲン大学に滞在した。1965年2月23日には学位論文「プロイセン絶対主義の崩壊過程における教育政策の研究：Abiturientenexamenの実施過程を通してみた」により東京教育大学から教育学博士の学位を授与されている。『近代ヨーロッパの教育と政治』（1971年）や『ペスタロッツ「ゲルトルート」入門』（1972年）などドイツの近代教育史・教育思想史に関する著作を持つ。1983年から1990年には『世界新教育運動選書』（全30巻、別巻3巻）の監修に携わった。

江藤恭二（1928年10月10日福島県福島市生、2013年12月25日没）は1945年4月より沼津兵学校で学ぶも、終戦にともない1945年10月に静岡高等学校に編入学し、1948年3月に卒業した。その後、1949年4月から1950年1月まで静岡県御殿場町立御殿場中学校に教諭として勤務するが、1950年4月には東京帝国大学文学部に入学し、1953年3月の卒業後は1953年4月より大学院で学び、1953年7月に退学した。1953年4月から1954年3月までは野間教育研究所史料編纂部の所員を務め、同時に1953年8月1日から1956年8月までは東

京大学教育学部の助手を務めている。その後、1956年9月からは九州大学教育学部の助手、1959年4月からは講師を務めるが、1960年4月からは助教授として名古屋大学教育学部に勤務し、1973年4月から1992年3月までは教授を務めている。1992年*から1994年*までは愛知淑徳大学文学部に教授として勤務し、さらに1995年*から2003年*までは愛知淑徳大学現代社会学部の教授を務めた。1968年10月から1969年10月までは文部省在外研究員としてベルリン・マックスプランク研究所およびミュンヘン大学にて研究に取り組んでいる。著作には論文「プロイセン民衆教育展開史序論」(『教育学研究』, 1956)や論文「ゴータ公国における教会・学校規程の構造的特質とそのエートス」(『日本の教育史学』, 1983), 『ドイツのこころ: ヲイマール精神の探求』(講談社, 1980)などのドイツ教育史に関するものが存在する。

大久保利謙(1900年1月25日東京市牛込区生, 1995年12月30日没)は1926年から1928年3月まで東京帝国大学文学部で学んだ後、1928年4月から1935年まで東京帝国大学文学部に副手として勤務した。1935年4月から1951年までは明治大学法学部の講師を務め、1951年4月から1953年3月まで国会図書館の司書を務めた後、1953年3月から1959年3月まで名古屋大学教育学部に教授として勤務した。同時に、1958年4月1日から1959年3月31日までは立教大学文学部の講師を務め、1959年4月から1965年3月31日までは教授を務めた。その後も1965年4月から1971年3月までは講師として立教大学文学部での勤務を継続している。著作には論文「明治二年京都に於ける小學校の設立に就て(一)」(『社会経済史学』, 1934)や『日本の大學』(創元社, 1943)などの学校制度史に関するもの、論文「版籍奉還の実施過程と華土族の生成」(『国史学』, 1977)や『明治憲法の出来るまで』(至文堂, 1966)などの行政史に関するもの、『森有禮』(文教書院, 1944)や『岩倉具視』(中央公論社, 1973)などの人物史に関するものが存在する。

仲新(1912年11月22日三重県南牟婁郡生, 1985年8月7日没)は1935年3月に池田師範学校専攻科を卒業した後、同年3月から大阪府殿山第二尋常高等小学校に訓導として勤務し、その後、1940年3月に第三高等学校を卒業して東京帝国大学文学部に進むと1942年9月に卒業し、大学院に進学した。1944年からは東京帝国大学文学部の副手となり、1945年からは特別研究生となった。1950年からは名古屋大学教育学部に勤務し、同年3月から1953年までは助教授、同年から1965年3月まで教授を務めている。名古屋大学での勤務と同時に1962年に東京大学教育学部に着任し、同年1962年12月11日から1973年4月1日まで教授を務めた。1973年4月1日から1981年3月まで青山学院大学文学部で教授を務め、1981年4月から1982年3月まで日本大学総合科学研究所に教授として勤務した後、1982年度には日本大学国際関係学部で教授を務めている。著作に『教科書の発達』(河出書房, 1947)や『近代教科書の成立』(日本図書センター, 1981)など教科書史に関する研究や、『明治初期の教育政策と地方への定着』(講談社, 1962)(1965年6月16日には学位論文「明治初期の教育政策と地方への定着」により東京教育大学から教育学博士の学位を受けている)や論文「近代学校観と学校制度の改革」(『教育学研究』, 1949), 論文「教育行政史上におけるDavid Murrayと「学監考案・日本教育法」」(『教育学研究』, 1956)など近代教育行政・制度史に関する研究に加え、論文「愛知県における中学校卒業者の就職とその移動状況」(『教育社会学研究』, 1955)など地域の教育実態に関する研究などが存在する。

結城陸郎(1911年9月生, 1999年3月23日没)は1931年4月から1936年4月まで石川県と東京市の小学校に訓導として勤務した後、1940年3月まで東北帝国大学法文学部(国史

学科)で学んだ。卒業後は1940年4月から1941年8月まで東京市と東京府の高等女学校の教諭を務め、1944年8月から1945年*までは助教授、1945年3月から1951年までは教授として東京第三師範学校に、1949年6月から1951年までは助教授(兼任)、1951年6月から1962年*までは教授として東京学芸大学に勤務した。1963年4月に講師として名古屋大学教育学部に着任すると、1965年4月から1975年4月1日まで教授を務めた。名古屋大学退職後、1975年4月から1982年3月までは皇學館大學文学部に教授として勤務している。1960年2月25日には学位論文「金沢文庫の教育史的意義」により日本大学から文学博士の学位を授与されている。著作には『金沢文庫と足利学校』(至文堂、1959)などの教育史、『日本文化史』(明玄書房、1964)などの文化史、『愛知県近代女子教育史』(愛知県郷土資料刊行会、2000)などの女子教育史に関するものが存在する。

篠田弘(1936年7月16日岐阜県稲葉郡生)は1955年4月から1959年3月まで名古屋大学教育学部で学んだ後、1959年4月から1961年3月までは同大学院教育学研究科修士課程、1961年4月から1964年3月までは同博士課程で学んだ。1964年4月から1966年3月までは安城学園女子短期大学の講師、1966年4月から1967年3月までは安城学園愛知女子大学の助教授を務め、1967年4月から1976年3月までは愛知学院大学(一般教育担当)の助教授として勤務した(その間、1968年*?から1976年3月までは同時に愛知学院短期大学の助教授)。1976年に名古屋大学教育学部に着任すると、同年4月から1985年までは助教授、そして1985年4月から1999年*まで教授を務めた。2000年*からは愛知学院大学教養部に教授として勤務している。著作には論文「教員養成の史的研究：学制期における地方府県の教員養成機関の成立形態」(『教育学研究』、1966)など教員養成史に関するものが存在する。

3) 教育社会学領域

小川太郎(1907年11月16日台北市生、1974年1月31日没)は1928年から1932年まで東京帝国大学文学部で学んだ後、1933年から1936年までは台北第一師範学校に教諭として勤務し、1942年に教諭として愛媛県師範学校に着任すると、1942年から1949年?まで教授を務めた。その後、1949年から1950年?まで愛媛県教育研究所の所長を務め、1950年から1952年?までは名古屋大学文学部の助教授となった。その後、1952年には助教授、1952年4月から1960年3月までは教授として名古屋大学教育学部に勤務したが、1960年4月1日から1971年3月31日までは神戸大学教育学部の教授となった。1971年から1973年までは日本福祉大学の教授、1973年からは学監を務めている。著作には論文「農村児童労働に関する一考察」(『教育社会学研究』、1955)や『生活綴方と教育』(明治図書出版、1966)などの社会問題、論文「差別問題と教育」(『教育学研究』、1971)や『子どもの教育権を守ろう』(明治図書出版、1971)などの人権問題、『立身出世主義の教育』(黎明書房、1957)などの立身出世に関するものなどが存在する。

木原健太郎(1921年3月7日生)は東京帝国大学文学部?を卒業後、東京学芸大学の講師並びに助教授(期間不明)を務め、1954年4月に名古屋大学教育学部の助教授となると、1966年*から1970年9月まで教授を務めた。その後、1970年10月1日から1983年4月1日まで国立教育研究所の研究員となり、1983年から1996年*までは創価大学教育学部に教授として勤務している。著作には論文「山村聚落内の階層意識に関する若干の考察」(『社会学評論』、1953)などの社会問題、論文「教育的意識の社会的条件：父親の考え方をめぐって」(『教育社

会学研究』, 1956) などの家族関係, 論文「テレビ集団聴視について」(『教育社会学研究』, 1957) や論文「マスコミと家庭の人間関係: テレビと子どもを中心に」(『教育社会学研究』, 1966) などのメディアと家族の関わり方, 論文「学校の社会学」(『教育社会学研究』, 1964) や『小集団指導』(明治図書出版, 1961), 『授業とコミュニケーション』(明治図書出版, 1963) などの学校教育に関するものなどが存在する。

潮木守一 (1934 年 11 月 11 日神奈川県生) は 1953 年 4 月に東京大学教養学部文科 I 類に入學し, 1957 年 3 月に東京大学教育学部を卒業している。1957 年 4 月から 1960 年 4 月までは東京大学教育学部の助手, 1960 年 4 月 16 日から 1963 年 9 月 1 日までは国立教育研究所の研究員を務め, 1963 年 9 月から 1967 年 2 月までは東京学芸大学学芸学部 (1966 年 4 月より教育学部) の助教授を務めた。1967 年に名古屋大学教育学部に着任すると, 同年 3 月から 1978 年までは助教授, 1978 年 4 月から 1991 年まで教授を務めた。その後, 1991 年 4 月から 1997 年*までは名古屋大学国際開発研究科に教授として勤務し, 名古屋大学退職後は 1998 年* 2002 年*までは武蔵野女子大現代社会学部の教授, 2003 年*から 2004 年*までは桜美林大学国際学部の教授, 2005 年*からは桜美林大学大学院国際学研究科の教授を務めた。1968 年 11 月 1 日から 1970 年 3 月 31 日まではアレキサンダー・フォン・フンボルト財団の奨学生としてベルリンのマックスプランク研究所で学んだ。1984 年 2 月 13 日には学位論文「近代大学の形成と変容: 19 世紀ドイツ大学の社会的構造」により東京大学から教育学博士の学位を授与されている。著作には論文「社会の学校評価」(『教育社会学研究』, 1959) や『大学と社会』(第一法規出版, 1982) など社会から捉えた教育の役割, 論文「教育計画の経済的基盤をめぐる諸理論: 序論的考察」(『教育社会学研究』, 1962), 論文「教員養成」(『教育社会学研究』, 1973) や『教員需要の将来展望』(福村出版, 1985), 論文「「証拠に基づく政策」はいかにして可能か?: 教員需要推計の事後検証をもととして」(『高等教育研究』, 2009) など主に教員養成を対象とした政策科学としての教育社会学の可能性, 論文「高等教育の国際比較: 高等教育卒業者の就業構造の比較研究」(『教育社会学研究』, 1971) や論文「高等教育卒業者の雇用構造に関する比較研究」(『日本比較教育学会紀要』, 1976), 『学歴社会の転換』(東京大学出版会, 1978), 論文「学歴の社会学: その理論的検討」(『教育社会学研究』, 1983), 論文「進路決定過程のパス解析: 高校進学過程の要因分析」(『教育社会学研究』, 1975), 論文「大学進学率上昇をもたらしたのは何なのか: ——計量分析と経験知の間で——」(『教育社会学研究』, 2008) など学歴の効用に関するものが存在する。また, 論文「ウェーバー社会学とヤスパースの「大学の理念」との内的関連性 教育共同体の構造類型」(『教育学研究』, 1971) や『近代大学の形成と変容: 19 世紀ドイツ大学の社会的構造』(東京大学出版会, 1973), 『ドイツ近代科学を支えた官僚: 影の文部大臣アルトホーフ』(中央公論社, 1993) などドイツの高等教育史, 『京都帝國大學の挑戦: 帝國大学史のひとつこま』(名古屋大学出版会, 1984) など日本の高等教育史, 『ドイツ大学への旅』(リクルート出版部, 1986) や『ドイツの大学: 文化史的考察』(講談社, 1992), 『アメリカの大学』(講談社, 1993) などドイツ・アメリカの高等教育の実態, 論文「転換期を迎える教育援助政策: リカレント・コスト重視型援助への移行をめぐる諸問題」(『教育社会学研究』, 1994) など国際教育援助に関するものも著している。

藤田英典 (1944 年 5 月 6 日石川県金沢市生) は 1965 年 4 月から 1969 年 3 月まで早稲田大学政治経済学部で学び, 1969 年 4 月から 1970 年 2 月まで住友銀行に勤務した後, 1970 年 4 月から 1975 年 3 月まで東京大学大学院教育学研究科で学んでいる。その間, 1972 年 9 月から

1974 年 8 月まではスタンフォード大学教育系大学院で学び、1978 年 8 月には学位論文「Education and Status Attainment in Modern Japan」によりスタンフォード大学から Ph.D. の学位を授与されている。1976 年 4 月から 1979 年 3 月まで名古屋大学教育学部で助手を務めた後、1979 年 4 月から 1986 年 3 月までは同助教授となり、さらに東京大学教育学部に異動すると、1986 年 4 月から 1992 年 9 月までは助教授、1992 年 10 月から 2003 年 3 月までは教授として勤務した。さらに 2003 年 4 月からは国際基督教大学教養学部にも勤務し、その後、立教大学文学部ならびに共栄大学教育学部にも勤務している。著作には論文「学歴の経済的社会的効用の国際比較」(『教育社会学研究』, 1983) など学歴の効用に関するもの、論文「教育改革と危機に瀕する日本の教育: 「ゆとり教育」政策と「学力重視」政策との矛盾を中心に」(『学校教育研究』, 2003) や論文「疑似市場的な教育制度構想の特徴と問題点」(『教育社会学研究』, 2003) など教育改革の問題点に関するもの、論文「学校化・情報化と人間形成空間の変容: 分節型社縁社会からクロスオーバー型趣味縁社会へ」(『現代社会学研究』, 1991) や論文「文化としての学校、組織としての学校」(『教育学研究』, 1991)、論文「教育社会学研究の半世紀: 戦後日本における教育環境の変容と教育社会学の展開」(『教育社会学研究』, 1992)、『子ども・学校・社会: 「豊かさ」のアイロニーのなかで』(東京大学出版会, 1991)、『家族とジェンダー: 教育と社会の構成原理』(世織書房, 2003) など教育と家族、社会の関係に関するものなどが存在する。

4) 教育方法学領域

重松鷹泰 (1908 年 8 月 7 日生, 1995 年 8 月 7 日没) は第一高等学校で学んだ後、1928 年 4 月から同年の夏にかけて徳島県板野郡大津東小学校で代用教員を務め、さらに 1929 年 3 月から 1929 年 8 月まで東京府立第一中学校の授業嘱託を務めながら、東京文理科大学(教育学科)で 1929 年 4 月から 1932 年 3 月まで学んだ。1932 年からは授業嘱託、1933 年からは教諭として東京府豊島師範学校に勤務し、1941 年からは視學員、1943 年からは教学官として東京府(1943 年からは東京都)に勤務した。1944 年からは近衛第三師団の通信隊に勤務するも、1946 年 3 月から 1946 年 9 月までは東京都の督学官を務め、1949 年 9 月からは文部省の事務官として教科書局に勤務した。1947 年から 1952 年までは奈良女子高等師範学校の教授となり、同時に 1949 年から 1950 年*は奈良女子大学理家政学部、1951 年*から 1952 年 3 月には同文学部の教授を務めた。1950 年に名古屋大学教育学部に異動し、1950 年 9 月 30 日から 1952 年 3 月までは教授(併任)、1952 年 3 月 31 日から 1972 年 3 月まで教授として名古屋大学教育学部に勤務した。その後、1972 年から 1979 年までは東京都立教育研究所の所長、1972 年から 1985 年までは帝塚山授業研究所の所長、1983 年から 1990 年までは東京都立日野市立幼児教育センターの所長も務めている。著作には『社会科教育法』(誠文堂新光社, 1955) や『理科教育の実践』(国土社, 1959) などの教科教育に関するもの、『授業分析の方法』(明治図書出版, 1961) や『わかる授業・わからせる授業』(明治図書出版, 1970) などの授業に関するものなどがある。

上田薫 (1920 年 5 月 17 日大阪府生, 2019 年 10 月 1 日没) は 1942 年から 1944 年 9 月まで京都帝国大学文学部で学び(指導教員は田邊元)、1946 年 9 月 13 日より文部省教科書局に勤務(のちに初等中等局に異動)した後、1961 年には名古屋大学教育学部に着任し、同年 9 月から 1968 年 4 月 30 日までは助教授、1968 年 5 月 1 日から同年 5 月 31 日まで教授として勤

務した。1968年に東京教育大学教育学部に異動すると、同年6月1日から1972年3月まで教授を務め、1972年4月1日から1984年3月5日までは立教大学文学部の教授、1984年3月5日から1990年3月31日までは都留文科大学の学長を務めた。その間、1960年4月から1969年6月までは信濃教育会教育研究所の第2代所長、1991年4月から1994年4月までは第4代所長を務めている。著作には『社会科の理論と方法』（1952年）など社会科教育に関するもの、『道徳教育の理論』（1960年）など道徳教育に関するものが存在するほか、『知られざる教育：抽象への抵抗』（1958年）、『人間形成の論理』（1964年）、『教育哲学の新生：経験主義とその周辺』（1964年）、『ずれによる創造：人間のための教育』（1973年）など教育哲学・思想に関するものが多数存在する。

三枝孝弘（1926年9月25日生）は1953年3月に東京教育大学教育学部を卒業し、1955年3月に同大学院教育学研究科を修了している。1951年2月から1960年7月までは助手として東京教育大学教育学部に勤務した後、岡山大学教育学部の助教授（1960年7月16日から1969年4月1日）を経て名古屋大学教育学部に着任した。1969年4月1日から1972年*まで助教授、1973年*から1987年3月まで教授として勤務した後、埼玉大学教育学部（1987年4月から1992年3月）ならびに白鷗大学法学部（1992年*から1996年*）で教授を務めた。著作には論文「ドイツ連邦共和国における社会科(政治教育)の実施過程とその性格」（『教育学研究』、1958）や論文「西ドイツにおける教授方式改革の問題：学力問題の教授学的アプローチ」（『教育学研究』、1962）などドイツの学校教育に関するもの、『ヘルバルト「一般教育学」入門』（明治図書出版、1982）などヘルバルトの思想に関するもの、『範例方式による授業の改造』（明治図書出版、1965）や『授業の動的システム：動態分析と構成への試論』（明治図書出版、1972）など授業方法に関するものなどがある。

日比裕（1936年2月8日生）は名古屋大学教育学部で学んだ後（期間不明）、1964年4月から1965年*に名古屋大学教育学部の助手を務めた。1966年*から1967年*までは助手、1968年*から1969年*までは講師、1970年*から1972年*までは助教授として島根大学教育学部に勤務するが、名古屋大学教育学部に異動すると1973年*から1982年*までは助教授、そして1983年*から1998年*まで教授を務めた。1999年*から2000年*までは東海学園女子短期大学の教授、2001年*から2005年*までは東海学園大学人文学部の教授を務めている。著作には論文「歴史教育とヴィジョン：主として改造主義教育哲学の観点より」（『教育哲学研究』、1962）など教育哲学的視点からの授業論や『授業分析の基礎理論』（明治図書出版、1967）などの授業研究に関するものなどがある。

5) 教育課程領域

広岡亮蔵（1908年10月25日奈良県生、1995年6月9日没）は1924年より奈良県師範学校で学んだ後、1928年より奈良県桜井町桜井小学校に勤務、1929年に東京高等師範学校に入学したが、1931年には思想運動による検挙を受けて同校を退学した。1931年より大阪市の小学校に勤務したが、思想問題で検挙され、退職する（時期は不明）。その後、1933年より大阪市内の出版社に勤務し、1936年からは大阪府弥刀小学校の代用教員となる。1937年に東京高等師範学校に復学し、1939年に卒業すると、東京文理科大学に進学し、1939年から1941年12月まで同地で学んだ。1941年からは京都府女子師範学校に勤務し（時期・職位不明）、京都

学芸大学に1951年*まで勤務した後(時期・職位不明)、1952年4月から1972年3月まで名古屋大学教育学部の教授を務めた。1972年*から1982年*まで聖母女学院短期大学に教授として勤務している。著作には論文「教育研究法の Phänomenologie : 上田薫氏の動的相対主義にたいして」(『教育学研究』, 1959)などの教育研究法, 『カリキュラムの理論と構成法』(黎明書房, 1949)や『教育内容の現代化』(明治図書出版, 1967)などの教育課程論, 『基礎学力』(金子書房, 1953)や『学力論』(明治図書出版, 1968)などの学力論, 『学習形態: 系統学習・問題解決学習』(明治図書出版, 1955)や『授業改造』(明治図書出版, 1964), 『学習形態論』(明治図書出版, 1968)などの授業論, 『学習過程論』(明治図書出版, 1968)や『学習過程の最適化』(明治図書出版, 1972)などの学習過程論, 『ブルーナー研究』(明治図書出版, 1969)などのブルーナー研究がある。

石黒一三(1921年1月9日愛知県豊川市生, 2007年6月20日没)は1938年4月から1941年3月まで愛知高等学校で学んだ後, 1941年4月から1943年9月まで東京帝国大学文学部で学んだ。1943年10月1日から1945年9月30日までは愛知航空機株式会社に勤務し, その後は1945年10月20日から教諭心得として愛知県半田工業学校に, 1947年1月31日から1947年3月までは地方教官として愛知県半田商工学校に勤務した。その後, 1947年3月31日からは文部教官として岐阜師範学校で働くが, 1948年3月31日からは岡崎高等師範学校に勤務し(職位不明), 1950年11月20日から1952年3月31日まで教授を務めた。同時に, 名古屋大学教育学部において1950年4月1日から1950年9月までは講師(兼任), 1950年9月30日から1955年10月までは講師, 1955年10月16日から1975年3月31日までは助教授, 1975年4月1日から1984年4月まで教授として勤務した。退職後, 1984年から1992年までは愛知学院大学教養部の教授を務めている。文部省在外研究員として, 1964年9月12日から1965年6月30日まではコロンビア大学, 1965年7月1日から9月10日まではスウェーデンのウプサラ大学およびデンマークに滞在している。著作には論文「カリキュラムにおけるシークエンスについて」(『名古屋大学教育学部紀要』, 1956)などの教育課程論, 論文「幼児の生活と教育: 明治初年より太平洋戦争まで(その1)」(『名古屋大学教育学部紀要』, 1958)や論文「高等学校生徒の音高識別力と指導上の問題点」(『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』, 1964)などの子ども研究, 論文「デンマークの教育: 初等および中等教育について」(『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』, 1966)などの外国教育制度研究, 論文「新任教師の不適應の分析的研究」(『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』, 1982)などの教師研究などがある。

安彦忠彦(1942年3月16日東京都文京区生)は1964年3月に東京大学教育学部を卒業し, 1967年3月には同教育学研究科修士課程を修了している。1968年*から1971年*までは大阪大学文学部の助手を務め, その後1971年8月16日に愛知教育大学教育学部の講師となると, 1973年*から1980年まで助教授を務めた。1980年10月からは名古屋大学教育学部の助教授となり, 1989年*から2001年*まで教授として勤務した後, 2002年*から2004年*までは早稲田大学教育学部の特任教授, 2005年*からは教授として勤務している。2012年からは神奈川大学の特別招聘教授を務める。1996年4月30日には学位論文「前期中等教育課程の位置とその独自性に関する研究」により名古屋大学から博士(教育学)の学位を授与されている。著作には論文「西ドイツ中等教育改革の基本的性格 教育課程と陶冶理念の側面からの検討」(『教育学研究』, 1971)や『よみがえるアメリカの中学校: 日本の中学校改革への提言』(有斐閣, 1987)などの外国教育制度研究, 論文「五日制学校と教育課程の再編に関する予備的考察:

愛知県足助中学校の実践を手掛かりとして」(『カリキュラム研究』, 1995) や『学校の教育課程編成と評価: カリキュラム構成基礎論』(明治図書出版, 1979), 『カリキュラム開発で進める学校改革』(明治図書出版, 2003), 『中学校カリキュラムの独自性と構成原理: 前期中等教育課程の比較研究』(明治図書出版, 1997) などの教育課程研究, 論文「教科教育の危機: 価値観との関連において」(『教育学研究』, 1981) や論文「学校教育における「教科」の本質と役割」(『学校教育研究』, 2009) などの教科教育研究, 『自己評価: 「自己教育論」を超えて』(日本図書文化協会, 1987) などの評価論, 『授業の個別指導入門』(明治図書出版, 1980) などの授業論, 『新学力観と基礎学力: 何が問われているか』(明治図書出版, 1996) などの学力論などがある。

6) 比較教育学領域

天野郁夫 (1936 年 1 月 7 日神奈川県足柄下郡生) は 1954 年から 1958 年まで一橋大学経済学部で学び, 1958 年には富士通の社員となるも, 1959 年から東京大学教育学部で学び, 1966 年に同大学院の博士課程を修了すると, 1966 年 4 月 1 日から 1971 年 6 月 30 日までは国立教育研究所の研究員を務めている。1972 年 7 月から 1979 年 3 月までは名古屋大学教育学部に助教授として勤務した後, 1979 年に東京大学教育学部に着任, 同年 4 月から 1983 年度までは助教授, 1984 年度から 1996 年 3 月までは教授を務めている。1996 年度からは国立学校財務センター (2004 年からは国立大学財務・経営センター) の教授, 1998 年度からは研究部部長, 2000 年度からは研究部長を務め, 2005 年に退職した。1974 年から 1975 年にかけてはイェール大学においてバートン・クラーク教授の下で比較高等研究に取り組み, 1990 年 9 月 5 日には学位論文「近代日本高等教育研究」により東京大学から教育学博士の学位を受けている。論文「産業革命期における技術者の育成形態と雇用構造」(『教育社会学研究』, 1965) や『旧制専門学校: 近代化への役割を見直す』(日本経済新聞社, 1978) など職業系教育に関する歴史的研究や, 論文「近代日本における高等教育と社会移動」(『教育社会学研究』, 1969) や『試験の社会史: 近代日本の試験・教育・社会』(東京大学出版会, 1983) など高等教育を通じた社会移動に関する歴史的研究などに取り組み, 近年は明治期以降の高等教育の発展過程に関する著作を著している。

7) 社会教育領域

小堀勉 (1911 年生) は 1932 年から 1935 年まで東京帝国大学文学部で学んだ後, 岡崎高等師範学校の教授を経て (期間不明), 名古屋大学教育学部の講師 (1949 年 8 月から 1953 年*), 助教授 (1954 年*から 1960 年*ないし 1961 年*), 教授 (1961 年*ないし 1962 年*から 1975 年 4 月) を務めた。1975 年*1977 年*までは名古屋学院大学経済学部の教授, 1978 年*から 1980 年*までは中京女子大学家政学部の教授を務めている。著作には論文「年少労働者の生活と教育: 中小企業を中心として」(『教育社会学研究』, 1954) などの勤労青少年研究や論文「ロンドン労働者大学と英国成人教育」(『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』, 1965) などのイギリス社会教育制度研究に関するものなどがある。

古木弘造 (1910 年 2 月 21 日神奈川県生) は 1930 年から 1933 年まで東京帝国大学文学部で学んだ後, 同大学院に進み, 東京農業教育専門学校の教授を務めた (期間不明)。東京大学文学部の助教授 (1947 年 12 月 10 日から 1951 年 4 月 17 日) となった後, 1952 年 7 月から 1973

年3月まで名古屋大学教育学部の教授として勤務している。著作には『幼児保育史』（巖松堂書店、1949）などの幼児教育研究に関するものがあるほか、共著として論文「勤労青少年教育の比較研究」（『名古屋大学教育学部紀要』、1958）など勤労青少年研究に関するものがある。

小川利夫（1926年5月17日神奈川県横須賀市生、2007年7月21日没）は1944年4月から1947年3月まで山形高等学校で学び、1949年4月から1950年3月まで東京大学文学部で学修に取り組んだ後、1950年4月から1952年3月まで同教育学部で学んでいる。1952年5月から1955年9月までは名古屋大学教育学部に助手として勤務したが、日本社会事業短期大学の講師（1955年10月から1958年*まで）、日本社会事業大学社会福祉学部の助教授（1959年4月から1966年まで）および教授（1966年11月から1973年*）を経て、1974年4月から1990年まで名古屋大学教育学部の教授を務めた。1990年からは愛知大学教養部に教授として勤務している。1980年9月5日から1980年11月4日までは文部省在外研究員としてアメリカを中心に欧米の成人教育について調査・研究している。著作には『社会教育と国民の学習権：現代社会教育研究入門』（勁草書房、1973）など社会教育に関するものや国民の学習権論に関するもの、『教育福祉の基本問題』（勁草書房、1985）など教育と福祉のつながりに関するものなどがある。

新海英行（1938年11月2日愛知県半田市生）は1958年4月から1962年3月まで名古屋大学教育学部で学んでいる。卒業後、当初は中部鋼板株式会社に勤務したが（1962年4月から1966年3月まで）、名古屋大学大学院教育学研究科において研究生（1966年4月から1967年3月まで）を務めた後、修士課程（1967年4月から1969年3月まで）ならびに博士課程（1969年4月から1972年3月まで）で学んだ。その後、香川大学教育学部において講師（1972年4月1日から1974年3月まで）、助教授（1974年4月から1976年3月31日まで（※『香川大学五十年史』では1975年3月31日に転出となっている））を務め、名古屋大学教育学部に異動すると、助教授（1976年4月から1987年9月まで）ならびに教授（1987年10月から2002年3月まで）として勤務した。2002年4月からは愛知学院大学情報政策学部（総合政策学部）の教授を務め、さらに2004年*からは名古屋柳城短期大学の理事も務めている。1993年8月から1993年9月までは文部省在外研究員としてロンドン大学、グラスゴー大学、ベルリン自由大学、フンボルト大学、ミュンヘン大学、ドイツ民衆大学連盟ならびにその他各種民衆大学で調査を行っている。2001年12月28日には学位論文「現代ドイツ民衆教育史研究：ヴァイマル期民衆大学の成立と展開」により名古屋大学から博士（教育学）の学位を授与されている。著作には論文「ワイマール初期の国民高等学校と労働者教育－1－：11月革命期を中心として」（『香川大学教育学部研究報告』、1974）や『現代ドイツ民衆教育史研究：ヴァイマル期民衆大学の成立と展開』（日本図書センター、2004）などのドイツ民衆教育史研究や、『地域コミュニティの教育力再生の動向と研究課題』（『コミュニティ政策』、2005）などの地域の教育力に関するもの、『子ども・青年の生活と教育：「生活台」に立つ教育改革を求めて』（大学教育出版、1993）などの子どもの生活に関するもの、『現代社会教育の軌跡と展望：生涯にわたる学習権保障の視点から』（大学教育出版、1999）などの生涯学習に関するものなどがある。

8) 教育行政学領域

※**仲新**については既述のため省略。

成田克矢（1925年10月11日生、1980年7月14日没）は東京大学教育学部で学び（期間

不明), 1954 年から名古屋大学教育学部に勤務し, 同年 5 月から 1959 年*までは講師, 1960 年*から 1968 年 6 月までは助教授を務めている。1968 年 7 月 1 日から 1979 年 3 月 31 日までは国立教育研究所の研究員を務め, 1979 年に東京大学教育学部に着任すると, 同年 4 月から 1980 年 7 月まで教授として勤務した。論文「社会の問題と児童の意識: 作文を通して見た被教育者の姿」(『教育社会学研究』, 1952) など学習指導に関する研究を行ったのち, 『イギリス教育政策史研究』(御茶の水書房, 1966) などイギリスの中等・高等教育の研究に取り組んだ。

鈴木英一(1932 年 1 月 2 日東京府北豊島郡巣鴨町生, 2005 年 11 月 12 日没) は 1950 年 3 月に東京都立北園高等学校を卒業した後, 教養学部文科 II 類に 1951 年 4 月に入学し, 1955 年 3 月に東京大学教育学部を卒業した。1956 年 4 月から 1958 年 3 月までは同大学院人文科学研究科修士課程, 1958 年 4 月から 1963 年 3 月までは博士課程で研究に取り組んでいる。1963 年 5 月から 1966 年までは講師, 1966 年 4 月から 1971 年 3 月 31 日までは助教授として北海道大学教育学部に勤務した後, 名古屋大学教育学部に着任すると助教授(併任)(1970 年 11 月から 1971 年まで), 助教授(1971 年 4 月から 1975 年まで), 教授(1975 年 10 月から 1995 年 3 月まで)を務めた。退職後は 1995 年*から 1996 年*までは東海産業短期大学, 1997 年*から 2003 年までは帝京平成大学(教職課程)に教授として勤務している。1979 年 8 月から 1980 年 8 月までは文部省在外研究員としてイギリスおよびアメリカに滞在した。1984 年 3 月 26 日には学位論文「日本占領と教育改革」により名古屋大学から法学博士の学位を授与されている。著作には論文「全国学力調査における教育政策の論理構造」(『教育学研究』, 1962) など学力調査に関するもの, 『現代日本の教育法』(勁草書房, 1979) などの教育法に関するもの, 論文「戦後日本の教育改革思想: とくに自由主義的知識人の戦前教育批判とその形成基盤について」(『北海道大学教育学部紀要』, 1964) などの教育思想史に関するもの, 『日本占領と教育改革』(勁草書房, 1983) などの戦後教育改革に関するものなどがある。

楠達雄(1940 年 1 月 16 日名古屋市生) は 1962 年 3 月に名古屋大学教育学部を卒業した後, 1962 年 4 月から 1964 年 3 月までは同大学院教育学研究科の修士課程, 1966 年 4 月から 1968 年 3 月までは博士課程において学んでいる。その間, 1964 年 4 月から 1966 年 3 月までは名古屋大学教育学部の助手を務め, 1969 年 4 月から 1974 年 3 月までは名古屋自由学院短期大学に講師として勤務した。1974 年に名古屋大学教育学部に着任すると, 1974 年 4 月から 1975 年までは講師, 1975 年 4 月から 1987 年までは助教授, 1987 年 4 月から 2003 年 3 月までは教授を務めている。2005 年からは名古屋芸術大学の教授となった。1986 年 4 月から 1987 年 1 月までは文部省在外研究員としてイギリスならびにアメリカを訪問している。著作には論文「中等教育改革に関する一考察: イギリスの総合制学校を中心に」(『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』, 1964) や論文「イギリス中等教育改革に関する研究: 教育改革における地方当局の役割」(『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』, 1974) などのイギリス中等教育制度に関する研究, 論文「教育経営と教職員組合運動」(『日本教育経営学会紀要』, 1996) や論文「教育専門職・教員組合と教育改革」(『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 教育科学』, 2003) など教職員組合に関する研究などがある。

9) 教育経営学領域

本山政雄(1910 年 10 月 10 日東京都生, 2009 年 5 月 11 日没) は第五高等学校で学んだ後,

1932年から1935年まで東京帝国大学文学部において、1935年から1938年までは同大学院において学んでいる。1938年からは千葉県立青年学校教員養成所に教諭として勤務し、国民生活学院の教授を務めた後（期間不明）、1945年から三重師範学校の教授となり、1953年まで三重大学学芸学部にて助教授ならびに教授として勤務している（期間不明）。1953年に名古屋大学教育学部に着任すると、助教授（1953年11月から1960年*ないしは1961年*）ならびに教授（1961年*ないしは1962年*から1973年3月19日まで）を務めている。1973年から1985年までは名古屋市長となり、1985年から1990年までは名古屋国際センターの理事長を務めた。著作には論文「家庭科教育の過去及び現在」（『三重大学学芸学部教育研究所研究紀要』、1952）など家庭科教育に関するもの、論文「明治年間における学校管理法」（『名古屋大学教育学部紀要』、1955）や論文「大正時代より第二次世界大戦までの学校経営論」（『名古屋大学教育学部紀要』、1956）など学校経営史研究、『教育裁判と教育行政の理論』（勁草書房、1981）など教育裁判に関するものなどがある。

秋元照夫（1909年生、1991年2月7日没）は1929年から1932年まで東京帝国大学文学部で学んだ後、岡崎高等師範学校の教授（期間不明）を務め、1949年8月から名古屋大学教育学部において助教授（期間不明）ならびに教授（1973年3月まで）として勤務した。1973年*から1983年*までは椋山女学園大学文学部の教授を務めている。著作には論文「青年労働者に対する教育施策の基礎：一つの実態調査を中心にして」（『教育社会学研究』、1955）など勤労青少年に関するもの、論文「学校の管理職能について」（『名古屋大学教育学部紀要』、1956）や論文「学校経営過程の実践的研究(1)：その方法論的側面から」（『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』、1965）など学校経営論、論文「高校進学における学校選択と学校差の問題について」（『名古屋大学教育学部紀要』、1957）など高校進学・選択に関するものなどがある。

高桑康雄（1929年8月21日愛知県名古屋市生、2012年11月23日没）は1952年3月に東京大学文学部を卒業後、1952年4月から1957年6月まで東京工業大学において助手を務めた。國學院大学文学部で講師（1957年6月から1960年まで）ならびに助教授（1960年3月から1963年3月まで）を務めた後、名古屋大学教育学部に着任し、1963年4月から1973年3月までは助教授、1973年4月から1984年3月までは教授として勤務した。退職後は1984年4月から1996年までは上智大学文学部、1996年から1999年までは江戸川大学社会学部に教授として勤務している。著作には論文「視聴覚的方法の発展と保健教育」（『学校保健研究』、1961）や『教育経営の革新と視聴覚教育』（日本映画教育協会、1976）など視聴覚教育に関するもの、論文「戦後日本における学級経営観の一断面：昭和24～25年の文部省著作手引書にみる」（『名古屋大学教育学部紀要 教育学科』、1964）など学級経営史に関するものなどがある。

III 小括（本稿の結びに代えて）

本稿では名古屋大学教育学部に勤務した教育学研究スタッフの事例を明らかにすることで、一連の先行研究に対する研究上の貢献を試みた。集められた資料からは、名古屋大学教育学部におけるスタッフ面での組織的発展過程ならびに各研究スタッフの伝記的データが明らかになった。もっとも、これらの伝記的データを基にした数量的分析などは紙幅の関係上、本稿では断念せざるを得なかった。また、それらの分析をもとに研究機関ごとの特徴や差異を明らかにする作業は、今後、他の研究大学ならびにその前身高等教育機関に勤務した教育学研究スタッ

フに関連するさらなる知見が一定程度蓄積されてはじめて可能となるものであり、現時点ではそうした研究の進展を待つこととしたい。

注

- 1) 本稿の課題と直接的な関係を持つ研究ですでに公刊されているのは、東京大学教育学部、広島大学教育学部、東北大学教育学部、筑波大学教育学域とそれらの前身高等教育機関に関する以下の諸研究である：鈴木篤（2018a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (1)—Method and Process of This Study and Limits of Previous Related Studies—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 39 巻 2 号，191-210 頁，鈴木篤（2018b）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (2)—Biographies of the staff members of Tokyo University and its Forerunner Institution in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 39 巻第 2 号，211-232 頁，鈴木篤（2018c）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (3)—Biographies of the staff members of Hiroshima University and its Forerunner Institutions in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 40 巻第 1 号，43-67 頁，鈴木篤（2019a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (4)—Biographies of the Staff Members of Tohoku University and its Forerunner Institutions in or before 1980—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 40 巻第 2 号，227-239 頁，鈴木篤（2019b）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (5)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (1)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 40 巻第 2 号，241-256 頁，鈴木篤（2019c）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (6)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (2)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 41 巻第 1 号，27-42 頁，鈴木篤（2020a）「A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (7)—Biographies of the Staff Members of Tsukuba University and its Forerunner Institutions in or before 1980 (3)—」、『大分大学教育学部研究紀要』第 41 巻第 2 号，149-158 頁。
- 2) 大学一覧や大学職員録、官庁の職員録以外に確認する手段の見当たらなかった、年度単位の年号については＊印を付している。

A Prosopographical Analysis of the History of Academic Staff Members of Educational Studies in Japanese Research Universities and Their Forerunner Institutions (8)

—Biographies of the Staff Members of the Faculty of Education of Nagoya University in or before 1980—

SUZUKI, Atsushi

Abstract

In this paper, using the method called ‘Prosopography’, I collected biographical data of the staff members in educational studies in the Faculty of Education of Nagoya University as a preparation to compare them to find the common characteristics and differences between groups and chronological periods. I concentrated on the course of their academic life and based my analysis on published materials concerning the case of Nagoya.

【Key words】 Prosopography, Educational Studies, Nagoya University, History